

◆慶應義塾大学大学院経営管理研究科(ビジネススクール)
「実践的授業方法について考える」ニュースレター(第16号・2008/4/30)◆◇

ニュースレターの第16号をお送りします。今月は、東京国際大学大学院で臨床心理士養成教育における実践的授業に積極的に取り組まれている、溝口純二先生の最終回をお送りします。

コンテンツ

本号のお知らせ
(イベント情報などをご案内します)

実践的授業法取組紹介
(実践教育に鋭意取り組まれている先生方の手記を掲載しています)

ショートエッセー
(実践的授業方法に関するエッセーを掲載しています)

■□本号のお知らせ.....

慶應義塾大学ビジネススクールのホームページからニュースレターのバックナンバーがご覧いただけます。
こちらからどうぞ。

↓

http://www.kbs.keio.ac.jp/gp/gp_news.html

.....

第15号でお知らせしました平成20年度の「ケースメソッド教授法」の日程が一部変更になりました。開講日程はこれで確定です。授業シラバスおよび受講申込受付は5月末にKBSホームページでお知らせする予定です。

9月27日(土)、10月11日(土)、10月25日(土)、11月15日(土)、11月2日(土) 計5回

場 所:慶應義塾大学大学院経営管理研究科(日吉新校舎)

時 間:各回とも10時30分～17時まで

.....□■□

□■□実践的授業法取組紹介.....

実践的授業法取組紹介

このコーナーでは、大学教員による実践的授業方法への先存取組を「私の履歴書」風に紹介してまいります。今月は、東京国際大学大学院で臨床心理士養成教育における実践的授業に積極的に取り組まれている、溝口純二先生の最終回です。

【第3回】

現場で働く臨床心理士に向けて

東京国際大学大学院
臨床心理学研究科
教授 溝口純二先生

今回は「ロールシャッハ・テスト」「ロールプレイ」「事例研究」「学内外での実習」「スーパーヴィジョン」といった、本学における実践教育の具体例を紹介しました。むしろ、本学では教員だけが話すという講義形式の授業をなるべく少なくして、できるだけ教員と学生が、そして学生同士が相互に話し合う授業を行おうとしています。

臨床心理士受験資格の第1種指定校である本学の場合、2年間の課程を修了し、半年後に試験を受けたとして、最短で3年ほどですぐに現場に出るわけです。在学中に現場で通用する能力を養うためには、実践教育が欠かせないと考えています。

大学院のカリキュラム全体は、臨床心理士資格認定協会の要請に応じなければならないため、それほど独自性を出すことはできません。しかし、授業科目の中でどういふことをどの程度教えるかは、大学院によって、あるいは教員によってある程度違いを出せるところだと思います。本学の特徴は、何と言っても実践を大事にしていることです。かといって知識や理論をないがしろにしているわけではありません。事実、この点が問われる資格試験の合格率は今年度も8割を越えています。

本学の学生は、遅くとも2年生になってから、カウンセリングを実際に体験します。それから心理査定も実施します。この二つは1種指定校の基本的な条件ですし、臨床心理士としてぜひとも身につけておかなければならないことです。

臨床心理士資格試験の指定校は平成19年の時点で156校ありますが、大学院によって何に力を入れているかということが、学会などの機会に分かります。第1種指定校に在学していても、カウンセリングや心理査定の経験に乏しい人もいます。臨床心理士全体の質を上げるために、私は学会の理事という立場で全国の大学院生が集まる研修会を行っています。「日本心理臨床学会」という心理学の中で最大規模の学会で、会員は2万人ほどいます。その理事会の中にある教育研修委員会という委員会の主催で、年3回、全国の大学院生に声をかけて、2泊3日の教育研修プログラムを実施しています。

もちろん、大学院を修了して現場に出た後も、臨床心理士である限り学び続けることが必要です。ほとんどの人は、地域ごとや全国で頻繁に行われる臨床心理士会の研修会に参加するなど、自主的に研鑽を積んでいます。

特に、スクールカウンセラーは頻繁に研修会をやっているようです。子どもたちの生活や発達のこと知らなければいけないし、グループセラピーなどを行うためにはリーダーシップも必要になってきます。社会心理の側面からアプローチしていくことも考えられます。臨床心理学という学問自体が様々な分野と関連しているので、学ぶことは尽きないのです。

私の専門は心理療法(カウンセリング)ですが、それらをずっとやってきて強く感じるがあります。それは、現場で大切なのはやはりコミュニケーションだということです。理論などを知ることも必要ですが、きちんとコミュニケーションを取って相手を理解するという訓練を、現場に出る前に少しでも多く積む必要があります。その機会を少しでも多く提供することこそ、大学院教育の役割ではないでしょうか。

「2年間の大学院生活のなかで、ロールプレイと事例検討会の授業が面白かった。現場に出た今、とても役立っている。」臨床心理士として現場で働く教え子から、最近、そんな便りがありました。

こういう世界に来て、こういう世界で仕事をしていくということには、もちろん大変なこともたくさんあります。活躍の場が増えてきているとはいえ、就職先についてはまだ少ないのが現状ですし、開業するといっても保険診療で行える医師のようにはいきません。現場では、常に難しい課題にも直面します。一旦職に就いても、高い専門性を維持するために常に能力を磨き続けることが求められる厳しい職業です。なかなか大変な世界でしんどいのですが、臨床心理学という学問の面白さ、人の心の深さや不思議さへの好奇心、そしてそうした人への心理的援助という臨床心理の実践のやりがい、実践的教育のなかで伝えていきたいと思っています。

.....□■□

□■□実践的授業方法ショートエッセー.....

このコーナーでは、ケースメソッド教育をはじめとする実践的授業方法に関するショートエッセーを、毎月少しずつお届けしています。

第15回 実践教育に潜む「甘さ」を克服する

3回に渡る溝口先生の寄稿を通して、私たちは、東京国際大学の大学院臨床心理研究科、そしてそこで教鞭を執る教員が、臨床心理を目指す学生の実践力を高めるために、さまざまな工夫を凝らしている様子を見てきた。実践型大学院が「実践型」と呼ばれる所以は、そのように呼ばれるための条件整備の多くの部分を、教える側が積極的に行うところにある。

しかしながら、「教える」という行為の向こう側にはいつも「学ぶ」という行為があり、これらが双方向に調和してはじめて、実践教育は真に実現される。学校側が提供するカリキュラム、個々の教員が行う授業に、学生の志や使命感、カリキュラム趣旨の理解、教員への信頼、提供された学習機会を生かし切って学ぼうとする姿勢や気概が相互に作用し合って、らせん状の上昇軌道が描かれる。これが理想だろう。

このとき、カリキュラムと学生の理想的な相互作用を起こさせるための、学ぶ側への働きかけとして、教える側

から何ができるか。また、何をすべきか。溝口先生の最終回に寄せて綴る筆者のエッセイでは、ここを議論してみたい。

実践教育の現場で扱いたいのは、言うまでもなく、実践を前提とした教育内容である。しかし、「現実の実践現場」ではなく「学校の教室」で行う教育であるがゆえに、どうしても現実感が欠如し、それに起因して、ある種の「甘さ」も潜みがちになる。ここで言う「甘さ」とは、例えばどのようなものか。まずはそこから考えよう。

実践現場には必ずいるのに、大学の教室にはまずいないのが、解決すべき問題を抱えている張本人である。臨床心理であればクライアントとその家族、企業経営であれば株主・顧客・取引先・従業員、医学であれば患者と家族、教育であれば学生、法律ならば原告や被告である。また、たいていの実践現場には自分たちと競合関係にある同業者がいるし、協力者としての上司や同僚もいる。実践者本人とこれらの登場人物は、利害を異にする関係にもなり得る。

実践の現場で事に当たる人は、登場人物たちの求めに絶えず対応し、その反応を受け止めて、また対応する。これが実践の基本サイクルであるからだ。ここまで説明すると、実践教育が甘くなるメカニズムが浮かび上がってくる。教室では、利害が異なる生身の登場人物たちが不在のまま学ぶのだから、実際に行動を起こすと引っかかる箇所、つまりく箇所でも、教室では引っかからずに、つまりかずに、学習が成立してしまう。これは「甘さ」に他ならない。

登場人物たちからの生々しい反応が即座に返ってこない教室でも、実践力を高める授業を行う工夫の余地はある。それでも、利害を異にする登場人物たちの心情や思惑と、学習者は直接対峙してはいないので、精神的なストレスからはほぼ解放されている。ここに最大の「甘さ」がある。実践現場では決してそこから逃れられない。むしろ、ストレス下での苦しい対応しか、登場人物たちには届かない。これが実践の基本性格なのである。

このように考えると、実践教育では、すべての利害関係者が実践者にぶつけてくるストレスを少しでも教室の中に再現するのが望ましい。実際には教室にいない当事者の存在を教師がどれだけクローズアップできるか。これが実践教育に従事する教師の重要課題であり、「甘さ」を抑えながら、実践的カリキュラムに「魂」を入れるスイッチなのだ。これは、慶應ビジネス・スクールが授業方法の中心に据えているケースメソッド授業を行う上での、基本課題のひとつでもある。

臨床心理士養成大学院の場合、学内に臨床心理センターを持ち、外来のクライアントを迎えて「診療」という実地訓練を行うことが、第1種校の認定条件のひとつになっている。これこそ「甘さ」を断った訓練環境の高度な実現型である。ところが、溝口先生の今月の文章の中に、「第1種校に在学していてもカウンセリングや心理査定の経験に乏しい人もいる」というくだりがあり、筆者の目はそこで留まった。カリキュラムが整備され、訓練環境や設備があればよいというものではないのである。

実践教育を標榜する以上は、「実践教育現場である大学と、実践現場である社会との共通性や連続性を維持する努力を、教師は怠らないこと」、そして「学生たちの背中をストレスフルな訓練環境に向かって押すことも、教師の役割に含まれると認識すること」。以上を、本稿の冒頭に立てた問いに対する、筆者の回答のひとつとしたい。

（文章 竹内伸一）

.....□■□

このメールマガジンは毎月1回発信しております。

.....
○お問い合わせ先

慶應義塾大学大学院経営管理研究科
ケースメソッド授業法研究普及室（高木晴夫研究室）
kbsnewsletter@info.keio.ac.jp

○慶應義塾大学大学院 経営管理研究科ウェブサイト

<http://www.kbs.keio.ac.jp/>

○慶應義塾大学大学院 経営管理研究科 文科省特色GP事業ウェブサイト

<http://www.kbs.keio.ac.jp/gp/index.html>
.....

発行者 高木晴夫

編集者 竹内伸一、住吉みどり

次号（第17号）は2008/5/31にお届けする予定です。

ご意見、ご感想、購読者のご紹介は kbsnewsletter@info.keio.ac.jp 宛に、また、メール送信先の変更を希望される方、購読を希望されない方、購読を中止したい方は、お手数ですが kbsnewsletter@info.keio.ac.jp までご一報ください。次号発信日の前日までのご連絡に対応させていただきます。

当メールマガジンの内容を転載する場合は、ご一報ください。